

故郷に恥じない人間になりたい 黒田 善太郎

文房具のkokyo創業者

近畿富山県人会を結成

富山大学に黒田講堂を寄付

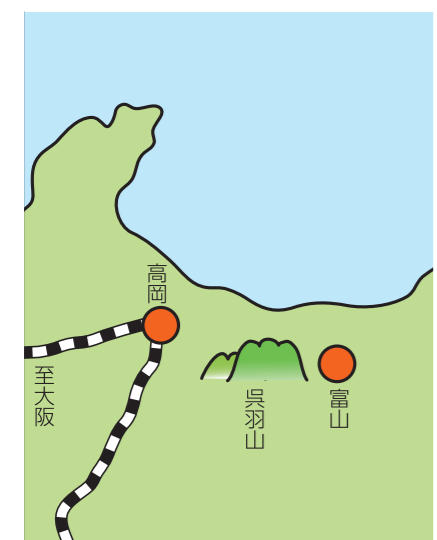


1879 (明治12) 年2月7日—1966 (昭和41) 年3月27日

12歳で父親と死別

善太郎は石川県鉄砲町（現富山市）でマッチ製造業を営む黒田屋の長男として生まれました。12歳のときに父親が病死したため、黒田家は共同経営者にマッチ工場

を譲り、善太郎は母親の実家の雑穀問屋茶ノ木屋へ働きに出ることになりました。仕事は下働きでしたが、一言も不平を言わずに一生懸命に仕事をしました。



商人として成功し、郷土のために尽くしたい

善太郎は15歳で独立し、ニワトリの卵を扱う仲買商をしながら商売について勉強しました。商人として修業するには都会へ出なければだめだと考えた善太郎は、大阪で自分を鍛えることにしました。これまでの客を世話になった雑穀問屋に紹介し、富山に残る家族が困ったときに助けてくれるよう頼んで高岡駅から大阪へ出発しました。1898 (明治31)年、善太郎が19歳の年でした。

当時は北陸線が高岡駅までしか来ておらず、善太郎は富山から呉羽山まで徒歩で、呉羽峠から人力車で高岡へ行くことになっていました。呉羽山の峠には母親、本家の老母、親戚の人たちがたくさん来て、善太郎を見送りました。

母親たちは「善太郎、しっかりやってこられ、立派なもんになられ」と手を振って叫びながら見送ってくれました。

紙を扱う仕事に出会い独立

大阪では親戚の運送店やマッチを製造する工場などで働きました。気持ちが落ち込むと、大阪の梅田駅へ行き、時刻表に「富山」の文字を探しました。1899 (明治32)年には鉄道が富山まで開通し、善太郎は時刻表に「富山」の文字を見つけ、勇気づけられました。善太郎は1901 (明治34)年、大福帳*式和帳の表紙を作っていた大阪市内の小林表紙店で働くこと

になりました。善太郎は生き生きと仕事に励みましたが、単純な作業でしたが、打ち込んで取り組んでみると愛着がわき、研究の余地もあったのです。

そしてお金も貯まったので、1905 (明治38)年、市内の家を借りて和帳の表紙屋「黒田表紙店」を開業して独立しました。



創業後10年ほどたったころの黒田表紙店の店舗

*大福帳【だいふくちょう】江戸時代から明治時代にかけて、商店が商売の記録に使っていた帳面。和紙を紐で綴じた帳面に書き込みました。

事業に成功し故郷へ恩返し

最初は表紙だけでしたが、間もなく和帳の製造も始め、帳簿本体と表紙の一貫生産を行って商売は繁盛しました。1913 (大正2)年ごろには、他社に先駆けて洋式帳簿の製造に乗り出しました。さらに、伝票仕切類、複写簿、便せんなど製品の種類を増やしていきました。製品はどれも品質が高く、使うのに便利だったため、国内だけでなく海外でも好評を得ました。

善太郎は故郷への熱い思いを社名などにも込めています。1914 (大正3)年に店名を「黒田国光堂」とし、後に商標を「国光」に決めました。「国」は富山県のことであり、「志」を立てて故郷を出たからには、故郷に恥じない人間になりたい、そうすれば『国の光』『国の誉れ』になるだろう」という善太郎の信念によるものです。

善太郎はこの信念を富山県への恩返し形の形で表し、1934 (昭和9)

年に近畿富山県人会を組織して会長に就いただけでなく、近畿富山会館の建設を呼びかけて理事長に就任したほか、富山大学に講堂（黒田講堂）を寄付しました。

善太郎が創業した会社は、文房具・事務用品の総合メーカー「kokyo」として発展を続けています。



和式の帳簿 (和帳)



現在の富山大学黒田講堂



洋式帳簿の製本場

夢や志をかなえたポイント

- 恵まれにくい環境に負けないでがんばる
- 生涯打ち込める仕事を見つける
- 故郷を愛する気持ちを失わない

豆知識 kokyoを代表するヒット商品「キャンパスノート」は、学生を中心に広く愛されるブランドとして成長し、販売数の累積は、1975 (昭和50)年の発売から現在まで17億冊に上っています。

1879 (明治12)	0歳
石川県鉄砲町に生まれる	
1891 (明治24)	12歳
雑穀問屋茶ノ木屋へ奉公に出る	
1894 (明治27)	15歳
茶ノ木屋から独立	
1898 (明治31)	19歳
大阪の運送店やマッチ工場などで働く	
1901 (明治34)	22歳
小林表紙店で奉公	
1905 (明治38)	26歳
和帳の表紙屋を開業	
1913 (大正2)	34歳
洋式帳簿の生産を始める	
1914 (大正3)	35歳
店名を黒田国光堂とする	
1917 (大正6)	38歳
商標を「国光」にする	
1957 (昭和32)	78歳
富山大学に黒田講堂を寄付する	
1961 (昭和36)	82歳
社名をkokyoにする	
1966 (昭和41)	87歳
亡くなる。勲四等瑞宝章を受章	

コラム 天職に一生を打ち込めと説いた善太郎

善太郎は職業について次のように語っています。

「人間というものは、すっぱだかで生まれてきて、両親や先生、社会のおかげで成長し、やがて一つの仕事を与えられる。それが天から与えられた天職である。(中略) その仕事に一生を打ちこんで、生命のあらん限り、全知全能をしばって、その天職を守りぬかねばならない」。



孫たちに囲まれた善太郎 (前列左から二人目)

兄弟で**日本一**の**事業家**へ 大谷 米太郎・竹次郎



米太郎 **大谷重工業を創業** **ホテルニューオータニを開業** **故郷に多額の寄付**
 竹次郎 **太物電極の開発に成功** **昭和電極を発展させる** **故郷に多額の寄付**
 米太郎 1881 (明治14) 年7月24日—1968 (昭和43) 年5月19日 / 竹次郎 1895 (明治28) 年4月27日—1971 (昭和46) 年11月21日

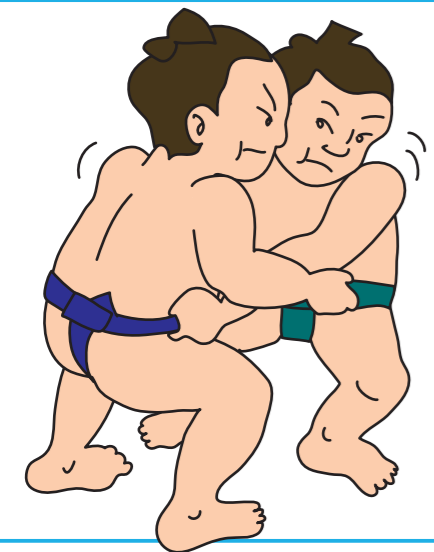
一生懸命働いて家計を助けた兄弟

砺波郡正得村（現小矢部市）の農家で米太郎は4人兄弟の長男、竹次郎は二男に生まれました。兄弟は家業の農作業を一生懸命手伝いながら勉強もがんばりました。兄の米太郎は13歳のときから働

きに出ました。夏は地主の家の農業を手伝い、冬には酒蔵で働いて家計を助めました。弟の竹次郎も小学校を卒業後、働きに出て、家計を助めました。



米太郎と竹次郎が生まれた家の跡。家屋は二人が出世してから建て替えられました。



将来に向けて勉強する

米太郎が24歳、竹次郎が10歳のときに父が亡くなり、米太郎が家を継ぎました。母親と3人の兄弟の暮らしを支えるため、米太郎は29歳のときに決心して、東京へ働きに出ました。商人を目指し、風呂屋・酒屋などの店で働き、商売で成功する方法を勉強しました。独立したいと考えていましたが、商売を始めるには元手のお金が必要

なので、なかなか踏み出せません。その後、体が大きかった米太郎は、「鷲尾嶽」というしこ名の力士になりました。竹次郎も16歳の春、兄を頼って上京し、酒屋で働き、そのうち、店を辞めて兄と同じ相撲部屋に入門しました。「金ヶ崎」のしこ名で相撲をとりましたが、体が小さいのでなかなか昇進はできませんでした。

兄弟で力を合わせて

米太郎は相撲の巡業で全国をまわる機会が多く、けいこの合間に工場を訪ねて経済の勉強をしました。特に北海道の室蘭では、製鉄工場を視察し、鉄の産業は将来発展すると確信しました。

大相撲では幕下の最上位まで上がりましたが、左手中指を骨折したので、あっさり引退して酒屋を始めました。商売のコツを覚えたせいか、本場所が開かれる旧両国国技

館へ一手に酒を納めることができました。開店から3年で支店が4店できるほど繁盛しました。

米太郎は酒屋でもうけたお金を元手にして1915（大正4）年、東京の深川で鉄を削る下請け工場をつくり、弟の竹次郎を呼び寄せ一緒に工場でも働きました。竹次郎は働きながら夜間の学校へ通い、簿記や経理の勉強をして将来の独立に備えました。



竹次郎 (昭和初年)

さまざまな分野で活躍

米太郎は次にロール（鉄を加熱し、鉄製品にするために使う円筒形状の鋳造品）を製造する工場をつくりました。竹次郎は工場の仕事を手伝いながら、工場近くで酒屋を開店しましたが、関東大震災で工場も酒屋も焼けてしまいます。

しかし兄弟が力を合わせて工場は再建され、鉄鋼製品の製造でたくさんの利益を上げました。さらに1939（昭和14）年に「大谷製鉄」を設立し、翌年には子会社と合併して「大谷重工業」という大きな会社にしました。米太郎は「鉄鋼王」とまで呼ばれ、多くの倒産寸前の会社を立て直しました。

米太郎は東京オリンピックが開かれた1964（昭和39）年、外国人用ホテルが不足しているからとの国の要請により、ホテルニューオータニを開業し、「ホテル王」とも呼ばれています。また、流通業の一大拠点として、東京卸売りセンター（現TOCビル）を創設しました。

弟の竹次郎は1947（昭和22）年に昭和電極（現SECカーボン）の社長に就任し、1962（昭和37）年、電極の直径が大きい「太物電極」の開発と国産化に成功しました。大型の電気炉を作るために欠かせない電極で、当時はノーベル賞級の価値があるとされました。



ホテルニューオータニの前に立つ米太郎



大谷製鋼所の工場を視察のために訪れた竹次郎



米太郎と竹次郎の銅像 (小矢部市水落)

夢や志をかなえたポイント

- 兄弟で助け合う
- 忙しくても勉強は忘れない
- 貯金を故郷の発展のために使う

1881 (明治14)	0歳
1881 (明治14) 年7月24日	誕生
1915 (大正4)	34歳
1915 (大正4) 年	東京ロール製作所を開業
1939 (昭和14)	58歳
1939 (昭和14) 年	兄弟で大谷製鉄を設立
1962 (昭和37)	81歳
1962 (昭和37) 年	大谷技術短期大学を設立
1964 (昭和39)	83歳
1964 (昭和39) 年	ホテルニューオータニを建設
1968 (昭和43)	86歳
1968 (昭和43) 年	亡くなる
1895 (明治28)	0歳
1895 (明治28) 年4月27日	誕生
1947 (昭和22)	52歳
1947 (昭和22) 年	昭和電極の社長に就任
1962 (昭和37)	67歳
1962 (昭和37) 年	太物電極の開発と国産化に成功
1971 (昭和46)	76歳
1971 (昭和46) 年	亡くなる

コラム 故郷のために建設資金などを寄付

米太郎と竹次郎は蓄えた財産を故郷へ寄付し、感謝の気持ちを表しています。

二人は自分たちが少年時代に苦労したため、特に教育関係に力を入れ、石動・大谷小学校の校舎の建設や大谷技術短期大学（現富山県立大学）の設立、小矢部市庁舎の建設、大谷会館（現小矢部市ふるさと博物館）などに多額の寄付をしました。1962（昭和37）年には兄弟そろって小矢部市名誉市民になっています。



米太郎の寄付で小矢部市庁舎が建設されました。



竹次郎の寄付で大谷小学校が建設されました。

豆知識 ホテルニューオータニは東京都千代田区紀尾井町にある高級ホテルです。開業当時は17階建ての最高層ビルでした。高岡市にはグループホテルのホテルニューオータニ高岡、黒部市には宇奈月ニューオータニホテルがあります。

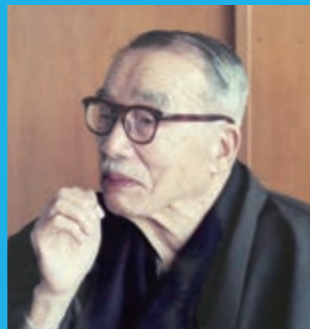
豆知識 SECカーボンは京都府福知山市にある製鉄のための電極を作る会社です。また、竹次郎が発展させた大谷製鉄は射水市にあり、電気炉による製鉄製品を製造しています。

日本と中国の友好関係を目指す 松村 謙三

元農林大臣

戦後の農地改革を实行

日中国交回復のかけ橋



1883 (明治16) 年1月24日—1971 (昭和46) 年8月21日

成績は良くても病弱な子ども

謙三は砺波郡福光町（現南砺市）で薬屋を営む裕福な家に生まれました。学校の成績は良かったのですが、病弱であったと伝えられています。父も祖父も政治に関心が高く、

家に政治家が出入りしていたことから、謙三も政治に興味を抱くようになりました。

謙三が19歳のときに描いた屏風絵（松村記念会館蔵）



社会制度を改め農村を救いたい

謙三は県立高岡中学校（現県立高岡高校）から早稲田大学の政治経済学科へ進みました。早稲田大学は謙三が子どものときから尊敬していた政治家の大隈重信がつくった大学です。謙三も政治の道を志すようになりました。謙三は日本の農業を心配し、卒業論文で「現在の農村を救うには、社会の制度を改めなければならない」と述べました。

卒業後は新聞記者として活躍しましたが、1913（大正2）年に父親が急死したため、新聞社を辞めて家業の薬屋を継ぎました。その後、福光町議会議員を経て富山県議会議員になりました。この間に謙三は町に図書館をつくったほか、耕地を整理する事業や県立福光高等女学校（現県立南砺福光高校）の創設などの仕事をしました。



謙三の卒業論文「日本農業恐慌論」（松村記念会館蔵）

農地を地主から小作人の手に

謙三は1928（昭和3）年の衆議院議員選挙に立候補し、45歳で初当選し、1945（昭和20）年には、農林大臣に就任しました。戦争に負けた日本は大変な食糧不足になりました。謙三は、これを解決するため、地主制*を解体して地主がもつ農地を小作人に分け与える「農地改革」を進め、1945（昭和20）年11月、第一次

農地改革を行いました。しかし、日本を占領していた連合国軍総司令部（GHQ）は、この改革では不十分だとして、さらに改革を進めるよう指示しました。これを受けて政府は1946（昭和21）年10月、第二次農地改革を決め、実施しました。この結果、自分の農地を耕す自作農が一気に増えました。



謙三は1932（昭和7）年、農林参与官（大臣を補佐する役職）となり、地元では就任を盛大に祝いました。（中央が謙三）（南砺市立中央図書館提供）

*地主制【じぬしせい】農地改革が行われる前の日本は、地主から農地を借りて米をつくる小作農が多くいました。広い農地だけをもって耕作しない大地主も多くいました。農地改革によって、農民のほとんどが自分の農地を耕す自作農になりました。



中国との国交回復の扉を開く

太平洋戦争の後、日本はアメリカと条約を結んで関係を強め、中国と対立する台湾を尊重する姿勢をとりました。このため中国は日本をよく思わず、両国の関係は悪くなっていました。

謙三は、日本と中国が昔から長い交流を続けてきたことや、中国が広い国土と豊富な資源をもつ大きな国であることから、日本と中国が仲良くしなければアジアに平和は訪れないと考えました。

そこで、国同士の友好関係を復活させる取り組みを始めました。政府は反対しましたが、謙三は信念を変えませんでした。

謙三は76歳の1959（昭和34）年、中国を訪れて周恩来首相と話し合いました。中国の日本に対する不信感は一掃されたものの、5度も中国を訪れるうちに中国の指導者たちは謙三の信念と人柄に打たれ、信用するようになり

ました。こうした謙三の努力の積み重ねが実り、1972（昭和47）年、日本の田中角栄首相が中国を訪問して、中国と日本の国交が回復することになりました。しかし、謙三は前の年に亡くなっており、この様子を見届けることはできませんでした。

中国は謙三の出身地である富山県に特に親しみを感じていて、遼寧省と富山県は友好協定を結んでいます。今も多くの団体の間で、盛んに交流が行われています。



中国の周恩来首相と会談する謙三（右）（南砺市立中央図書館提供）



福光町と紹興市が友好関係を結んだ記念碑の除幕式（南砺市立中央図書館提供）

夢や志をかなえたポイント

- 弱い立場の人々を助ける
- 周囲の人や外国人と友好的な関係を築く
- 相手に信頼してもらえるまで話し合う

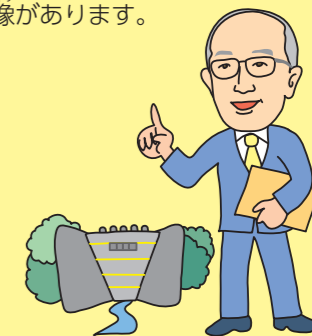
1883 (明治16)	0歳
砺波郡福光町の薬屋に生まれる	
1906 (明治39)	23歳
早稲田大学を卒業し報知新聞社に入社	
1913 (大正2)	30歳
家業の薬屋を継ぐ	
1919 (大正8)	36歳
富山県議会議員に当選	
1928 (昭和3)	45歳
衆議院議員に初当選	
1945 (昭和20)	62歳
農林大臣になり農地改革に取り組む	
1959 (昭和34)	76歳
中国を訪問し周恩来首相と話し合う	
1964 (昭和39)	81歳
勲一等旭日大綬章を受章	
1969 (昭和44)	86歳
政界を引退	
1971 (昭和46)	88歳
病気のため亡くなる	

コラム ダムを造って 農民を救おうと考えた謙三

小矢部川とその支流は水の量の変動が大きく、下流の村々は洪水や干ばつの被害をたびたび受けていました。謙三は、この小矢部川にダムを造って農民を救おうと考えました。

ダム建設によりダムの底に沈んでしまう村の住民たちは、この計画に反対しましたが、謙三の説得を受け、離村を決意しました。

刀利ダムは1967（昭和42）年に完成しました。そのほりにはダム建設に力を尽くした謙三の胸像があります。



富山県の若者に高等教育の機会を 馬場 はる

旧制富山高校の創設費を寄付

「ヘルン文庫」を寄贈

女性初の富山市名誉市民



1886 (明治19) 年2月22日—1971 (昭和46) 年5月20日

商家で厳しいしつけを受ける

下新川郡泊町 (現朝日町) の旧家小沢家で生まれました。小沢家は大変裕福な商人の家で、江戸時代に加賀藩の十村も務めた名のある家柄でした。はるは厳しいしつ

けを受けて育ちました。

はるは15歳のときに、上新川郡東岩瀬町 (現富山市) で海運業を営んでいた馬場家の長男、馬場道久に嫁ぎました。



馬場家



若いころの姿 (馬場家提供)

富山にも高校をつくりたい

はるは一男三女の子どものに恵まれ、幸せな生活を送っていました。しかし、夫の道久は40歳の若さで亡くなってしまい、子育てと海運業の経営を一身に背負うことになってしまいました。

長男の正治が県立富山中学校 (現県立富山高校) から慶応義塾 (東京都) に入学したとき、受験勉強に苦しむ姿を見て心を痛めたはるは、「県内にも高校があれば

いいのに」と考えました。

このように考えていたのははるだけでなく、多くの県民の願いでした。当時、富山県には中学校より上級の学校はなかったので、旧制高校に進学したければ、石川県や新潟県のほか、東京など大都市に行くしかありません。

しかも、日本全体で高校が少なかったため、入学試験はとて難しかったのです。

旧制富山高校 (現富山大学) 設立に多額の寄付

夫が亡くなった4年後の1923 (大正12) 年、はるは「高校創設に使ってほしい」と県に150万円 (現在の20億円程度：米価から推計) を超える寄付をしました。

県はこの寄付金に県のお金を足して、同年10月、県内で初めての高校となる旧制富山高校 (現富山大学) を設立しました。上新川郡大広田村 (現富山市蓮町) に校舎が建てられ、1924 (大正13) 年春

に開校し、第1回入学生を迎えました。

この高校は7年制で、生徒は尋常科で4年間中学校の勉強をした後、高等科に進んでさらに3年間学びます。

尋常科に入学すると従来の旧制高校受験の必要がなく、県内から通学ができるので親の負担も少なくて済むことから、県民は旧制富山高校の開校をとて喜びまし



旧制富山高校の跡は現在、馬場記念公園となっています。

た。毎年多くの生徒が、旧制富山高校の入学試験を受けました。

*ラフカディオ・ハーン 明治時代中期に来日したアイランド人の作家、教育者、ジャーナリスト。小泉八雲と名乗り、『怪談』などの文学作品を通じて日本の文化を海外へ紹介しました。

女性初の富山市名誉市民となる

はるは旧制富山高校が開校された後も、高校のために寄付を続けました。明治時代の文豪として知られるラフカディオ・ハーン*の蔵書などをその遺族から買い受け、「ヘルン文庫」として開校の記念に高校へ寄贈しています。

旧制富山高校は多くの優れた卒業生を旧帝国大学などに送り出しました。1949 (昭和24) 年に国立の富山大学が設置されたのに伴い、旧制富山高校は27年の歴史を閉じて富山大学文理学部として引き継がれました。さらに文理学部は経済学部、人文学部、理学部として発展しました。貴重な「ヘルン文庫」は富山大学附属図書館に保管され、世界の研究者によって活用されています。

こうした業績をもつはるは、富山大学の生みの親として、富山市

から1961 (昭和36) 年、名誉市民の称号を贈られました。女性が富山市の名誉市民に選ばれたのは初めてのことでした。

若くして夫に先立たれた不幸に負けることなく、夫の残した海運会社を切り盛りしながら、数々の社会貢献を行ったはるは、一方で、母としても4人の子どもを立派に育てました。当時、はるを「日本婦人の鏡」とたたえた人もいます。



ヘルン文庫



旧制富山高校

夢や志をかなえたポイント!

- ・周りのためにできることを実行する
- ・悲しいことを乗り越える
- ・家族を大切にする

豆知識 芥川賞を受賞した作家の堀田善衛 (→ 84 ページ) は堀田くにの三男です。

- 1886 (明治19) 0歳
下新川郡泊町の商家に生まれる
- 1899 (明治32) 13歳
生家の小沢家が全焼
- 1902 (明治35) 15歳
東岩瀬で海運業を営む馬場道久と結婚
- 1919 (大正8) 33歳
夫を亡くし子育てをしながら家業を継ぐ
- 1923 (大正12) 37歳
旧制富山高校を設立するため、県に多額の寄付をする
- 1924 (大正13) 38歳
小泉八雲の蔵書や原稿「ヘルン文庫」を旧制富山高校に寄付
- 1961 (昭和36) 75歳
富山市の名誉市民に選ばれる
- 1971 (昭和46) 85歳
亡くなる

コラム 富山県で初の託児所をつくった堀田くに

馬場はるが県に多額の寄付をした1か月前の1923 (大正12) 年4月、伏木町で、伏木婦女会によって無料の私設託児所が開設されました。その運動の中心になって活躍したのが堀田くににです。

くには伏木港で働く若い母親が子どもを預けて安心して働けるようにと、婦女会の仲間と協力し合い、町内のお寺の御堂を借りて小さな託児所を開きました。私設の託児所は県内で初めて、全国でも7番目でした。



園児と触れ合う堀田くに (伏木保育園提供)

土砂の流下を食い止めたい 赤木 正雄

立山砂防工事事務所の初代所長 「白岩砂防えん堤」を建設 「日本砂防の父」と呼ばれる



1887 (明治20) 年3月24日—1972 (昭和47) 年9月24日

生家の軒先に避難用の船

兵庫県城崎郡中筋村 (現豊岡市) の裕福な農家で6人兄弟の末っ子に生まれました。中筋村は暴れ川として知られる円山川の近くであり、何度も水害に遭っていました。家々は2mもかさ上げして建てられ、軒先には避難に使う舟がつるしてありました。村の有力者である父は、円山川治いの開墾と堤防を守る責任者でした。



正雄の生家 ((社) 全国治水砂防協会提供)

新渡戸校長の訓示で治水を志す



第一高校に入学したころの正雄 (前列左) と家族 ((社) 全国治水砂防協会提供)

1910 (明治43) 年8月、関東地方は大雨に襲われ、東京周辺が大洪水に見舞われました。県立豊岡中学校 (現県立豊岡高校) から第一高校 (現東京大学) へ進んでいた正雄はその日、東海道線で東京に戻る途中、御殿場駅で列車が止まってしまい、1日遅れて東京に到着しました。

当時の始業式は9月に行われ、新渡戸稲造校長は訓示の中で大洪水にふれ、「治水という仕事は地味な仕事であるが、人生は表に立つばかりが最善でない。諸君のうちで一人でも一生を治水に捧げ、水害をなくすことに志を立てる者がいないか」と話しました。これを聞いた正雄は、故郷の水害と上京のときの事故を思い、治水に生涯をかける決意をしたのです。

オーストリアへ自費留学

正雄は東京帝国大学農学部 (現東京大学) 林学科で、植林による砂防について勉強しました。卒業して、国内の政治を担当する内務省の土木局に入りました。

土木局では土木科出身者が多く、林学科を出て就職したのは正雄が初めてでした。土木局がこれからの治水事業は、水源地で土石流の発生を防ぐ砂防工事が必要になってくると考えていたからです。

正雄は滋賀県などの任地で山に

木を植えたり、土砂を食い止める砂防えん堤を造ったりしました。できたばかりの施設が激しい土石流に壊されてしまうこともありました。日本の砂防技術の遅れを感じた正雄は、砂防事業が世界で最も進んでいたオーストリアへ自分のお金で留学し、2年間当時の最新技術を学びました。

正雄は「木を植えるだけでは土石流は止められない」という思いで帰って来たのでした。



ウィーンに留学したころの正雄 ((社) 全国治水砂防協会提供)

***立山カルデラ** カルデラとは、火山活動によってできたくぼ地のことです。スペイン語で「釜」「鍋」を意味します。立山カルデラの広さは東西およそ6.5km、南北およそ4.5kmです。

カルデラ出口に巨大砂防えん堤を

急流で有名な常願寺川の上流には巨大なくぼ地「立山カルデラ*」があります。1858 (安政5) 年の飛越地震ではカルデラの斜面が崩れて大量の土石流が発生して死者140人、けが人約9000人の被害をもたらしました。

富山県は明治の後期から砂防工事を始めましたが、繰り返される洪水で砂防えん堤が壊されたので、国が工事に乗り出すことになりました。その責任者に選ばれたのが正雄でした。

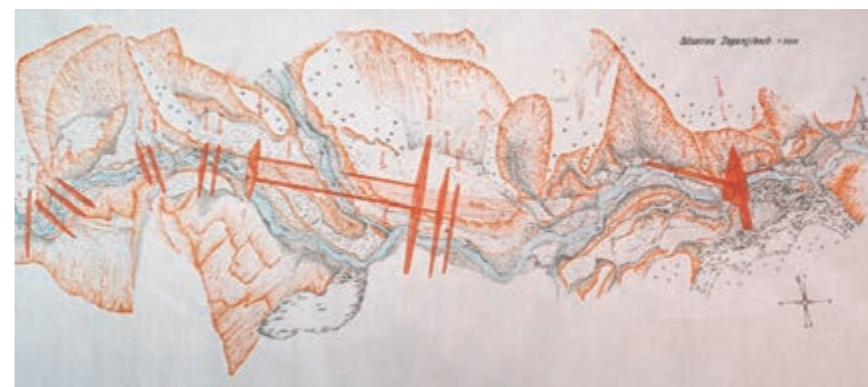
正雄は1926 (大正15) 年に立山砂防工事事務所の初代所長になり、カルデラの出口に大きな砂防えん堤 (ダム) を造ってカルデラから土砂が流れ出るのを防ぐ計画を立てました。たくさんの予算がかかる大変な事業です。1927 (昭和2) 年、材料などを運ぶための軌道工事が開始されました。1929 (昭和4) 年にはえん堤本体の工事が始まり、高さ63mと日本一の白岩砂防えん堤が1939 (昭和14) 年に

完成しました。正雄は完成のめどが立った1930 (昭和5) 年に立山砂防工事事務所を去りましたが、白岩砂防えん堤は完成後も補強工事が重ねられました。

立山の砂防事業は「世界最大の砂防事業」といわれ、正雄は「日本砂防の父」と呼ばれるようになりました。



白岩砂防えん堤 (国土交通省北陸地方整備局立山砂防事務所提供)



正雄が作った常願寺川砂防全体計画平面図 ((社) 全国治水砂防協会提供)

夢や志をかなえたポイント

- 地味な仕事にもやりがいを見つける
- 最先端の技術を研究する
- たくさんの労力がかかっても最善の策をとる

豆知識 正雄が建設を指揮した「白岩砂防えん堤」は2009 (平成21) 年4月、国の重要文化財に認定されました。砂防施設では全国で初めての重要文化財です。

- 1887 (明治20) 0歳
兵庫県城崎郡中筋村に生まれる
- 1908 (明治41) 21歳
兵庫県立豊岡中学校を卒業
- 1914 (大正3) 27歳
東京帝国大学を卒業し内務省へ入省
- 1923 (大正12) 36歳
オーストリアへ留学
- 1926 (大正15) 39歳
立山砂防工事事務所の初代所長になる
- 1930 (昭和5) 43歳
立山砂防工事事務所を辞める
- 1939 (昭和14) 52歳
白岩砂防えん堤が完成
- 1942 (昭和17) 55歳
貴族院議員に当選
- 1947 (昭和22) 60歳
参議院議員に当選
- 1972 (昭和47) 85歳
亡くなる

コラム 自分の荷物は自分で

正雄は、山を歩く者は自分の荷物を自分で持たねばならないという考えで、部下がついて来ても絶対に荷物を持たせませんでした。

自分の荷物を入れたリュックサックを背負い、長袖シャツにニッカーボッカーズ (長さが膝下までの短ズボン)、登山靴をはいた正雄の姿は正雄独特のスタイルとして関係者の間では有名でした。



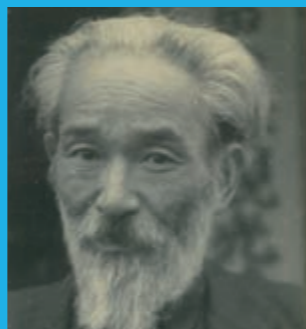
1961 (昭和36) 年、立山砂防を視察に訪れた正雄 (国土交通省北陸地方整備局立山砂防事務所提供)

郷土富山の文化を研究 翁久允

ジャーナリスト・文学者

「移民地文学」の先駆け

郷土研究雑誌「高志人」を創刊



1888 (明治21) 年2月8日—1973 (昭和48) 年2月14日

寄宿舎生活を送り、文学を愛する

上野川郡東谷村 (現立山町) で漢方医翁源指の二男に生まれ幼名は允といました。県立富山中学校 (現県立富山高校) へ入学し、寄宿舎生活を送りました。文学を愛し、文学の会な

どで才能を発揮していました。

富山中学校時代の久允 (後列右) 「(資料翁久允と移民社会 [1] 移植樹) より」



広く世界を見てみたい

富山中学校3年生 (当時は5年制) のとき、英語教師の舎監 (寄宿舎を管理、監督する先生) に反抗し、仲間と一緒に人の排泄物を床にまく事件を起こしました。優秀な生徒が集まる学校での事件は新聞にも報じられ、大問題になりました。久允は中心人物ではありませんでしたが、他の7人とともに退学処分となりました。富山にいづらなくなった久允は兄

を頼って上京し、今の滑川市出身の女性運動家、中川幸子の私塾「三省学舎」に入りました。久允が海外への関心をもったのは、次に入学した順天中学校 (現順天高校) の地理の先生の影響でした。

19歳の春、一人でアメリカのシアトルへ渡り、イチゴを摘む仕事、エレベーターボーイなど職を転々として苦労を重ねた後、現地の日本語新聞に随筆や小説を載せたり、

サンフランシスコで日米新聞の記者として活躍したりしました。



記者をしていたころの久允 (『わが父翁久允』より)

日本人移民の生活を紹介

当時のアメリカでは、日本と日本人を排除しようとする運動がありました。アメリカに17年間滞在した久允が痛感したのは、そうした排日運動にからんで日本人移民がひどい生活を強いられていることです。1923 (大正12) 年、久允が初めての短編集『移植樹』を出版すると、アメリカの日本人社会で大きな反響を呼びました。

久允が「移民地文学」の先駆けと言われるのは、この作品をはじめとして移民地を舞台にした多くの小説を発表しているためです。

久允は帰国後に朝日新聞社へ入社しました。『週刊朝日』の編集長にもなり、ジャーナリストとして活躍しました。久允は菊池寛・泉鏡花・川端康成ら多くの小説家や画家たちと交流しました。



アメリカで撮影した写真 (前列左が久允) 「(資料翁久允と移民社会 [1] 移植樹) より」

* 移民地文学 [いみんちぶんがく] 移住して異国で生活する日本人たちの人生を通じて、異文化交流や集団の中の個人の存在などを描く文学の分野です。翁久允の作品がその先駆けとされます。

富山の郷土文化を研究

1931 (昭和6) 年には美人画で知られる竹久夢二とアメリカへ行き、2年後はインドに渡り、各地の寺院を巡ってきました。帰国後の久允は仏教の世界を主題にした作品を発表しています。

次に久允が情熱を燃やしたのは、郷土富山の研究と郷土誌の発行でした。民俗学者の柳田国男に相談し、1936 (昭和11) 年、郷土研究雑誌「高志人」を創刊しました。久允は東京と富山を往復して郷土文化の掘り起こしに努め、37年間にわたり、398号まで発行を続けました。

その間、久允はこの世を「真」「正」「愛」に満ちた理想の世界にしたいと願うようになりました。戦争が終わった1945 (昭和20) 年、57歳になった久允は富山へ帰り、今の富山市磯部町 (護国神社の一角) で建てた新居は、久允が

85歳で亡くなるまでの文章を書く活動の拠点となりました。

1953 (昭和28) 年に宗教法人「三尊道舎」を設立し、自宅はその道場としても使われました。

久允は80歳になって「曼荼羅画帖」を描き、それを売って得られたお金で学問を奨励し、研究費を援助する財団をつくりました。現在も「翁久允財団」の名で郷土の人材の育成に役立てられています。また、富山市立図書館には、約2700点の翁久允文庫があります。



郷土研究雑誌「高志人」 (富山県立図書館蔵)



久允が住んだ三尊道舎 (富山市磯部町)



久允が海外や国内の旅の思い出を描きつづった画帖

夢や志をかなえたポイント

- どんな状況でも勉強の意欲を失わない
- 就きたい仕事への夢をあきらめない
- 富山の歴史や文化についてよく知る

1888 (明治21)	0歳
上野川郡東谷村に生まれる	
1902 (明治35)	14歳
県立富山中学校に入学	
1905 (明治38)	17歳
上野川順天中学校に編入	
1907 (明治40)	19歳
アメリカへ渡る	
1910 (明治43)	22歳
邦字新聞公募の新年小説に入賞	
1921 (大正10)	33歳
ワシントン軍縮会議に特派員として出席	
1923 (大正12)	35歳
初めての創作集『移植樹』を出版	
1924 (大正13)	36歳
帰国し朝日新聞社に入社	
1936 (昭和11)	48歳
月刊『高志人』、『図説世界史大成』全11巻を出版	
1949 (昭和24)	61歳
仏典書を執筆	
1971 (昭和46)	83歳
『翁久允全集』10巻をまとめる	
1973 (昭和48)	85歳
全集の仕事で亡くなる	

コラム 竹久夢二と一緒に宇奈月を訪問

久允はシアトルにいたとき、日本の兄に夢二の絵入りの小唄集『三味線草』を送ってもらってから夢二のファンになりました。夢二は大正時代に活躍した画家で詩人です。数多くの美人画を残し、その作品は「夢二式美人」と呼ばれています。

久允は1928 (昭和3) 年6月、夢二を黒部峡谷に誘いました。二人はトロッコ電車に乗ったり、夜は宇奈月の旅館に泊まるなど、旅を満喫しました。



夢二の著作本『三味線草』表紙 (夢二郷土美術館蔵)

必要なものを発明しよう

川原田 政太郎

世界初のテレビの公開実験

電気時計を発明

サツマイモの保存装置を開発



1890 (明治23) 年8月7日—1983 (昭和58) 年9月6日

貧しい中で勉学に励む

政太郎は下新川郡下野方村（現魚津市）で農家の三男に生まれました。家は貧しく、魚津町（現魚津市）の医院で薬局の見習いとして働きながら勉強し、東京の中学

校に進みました。家計が苦しかったので学費と生活費のため学校から帰った後、毎日夜遅くまで働きました。それでも中学校は優秀な成績で卒業しました。



生家跡近くに建つ顕彰碑（魚津市本江）

社会に役立つものをつくりたい

早稲田大学理工科の予科（本科へ進む前の学年）へ入学した後も、生活費と学費をまかなうのに生活を切り詰め、夜間の仕事に就いていました。

卒業後は会社に勤めましたが、電気の研究をしたかったうえに恩師の依頼もあり、早稲田大学に戻りました。

政太郎が最初に発明したのは同期電動機という特殊なモーターです。1922（大正11）年には助教となり、その後、モーターの特許料を使ってアメリカ・イギリス・フランスへ留学しました。ヨーロッパ各国で目にしたのは、日本よりはるかに進んでいたテレビに関する研究でした。



政太郎（中央）は、早稲田大学の予科に入学する前の1年間、天神尋常小学校の先生になりました。（魚津市立本江公民館提供）

世界初の大型テレビ公開実験

3年後に帰国してから、早稲田大学理工学部の教授となった政太郎は、テレビの実用化に向けて本格的な研究に取り組み始めました。

このころ日本では、「テレビの父」と呼ばれる高柳健次郎が1926（大正15）年、世界で初めてブラウン管を用いた電子式のテレビを開発していました。

1930（昭和5）年、政太郎は機械式の早稲田式テレビジョンの開発に成功し、東京・有楽町の朝

日新聞社の講堂で、世界で初めてテレビの公開実験を成功させました。

政太郎の早稲田式テレビジョンは大型スクリーンに映し出すことができるという、電子式との大きな違いがありました。

翌年には早稲田大学野球部の試合の様相を画像で理工学部研究室へ送信し、世界で初めて屋外での実況中継を行いました。

このテレビの発明は、現在のよう

にテレビが当たり前の社会ができる基礎となりました。



早稲田式テレビジョンのフィルム撮影装置（電磁応用研究所提供）



たくさんの発明を発表

第一次世界大戦後、電圧や周波数*は安定していませんでした。そこで、政太郎はそれらの変動に影響されない正確な時計を作ろうと考えました。政太郎は、磁気ので物質がわずかに変形する作用を利用して、いろいろな時計を作ったことで知られています。中でも1931（昭和6）年、東京・上野のビルの壁に設置された「世界一超大大時計」は、直径18mの文字盤にネオンで輝く長針と短針が取り付けられ、当時の人々をびっくりさせました。

ほかにも政太郎は、温度自動巻時計、気圧自動時計、光時計などのいろいろな時計をたくさん作っています。

また、電気が流れるときに磁気が発生する働きで新しいことがで

きないかを研究したいと考えた政太郎は1936（昭和11）年、「電磁工業研究所」（現電磁応用研究所）に招かれ、後に所長になりました。

第二次世界大戦後、深刻な食糧不足が問題になったときには、ご飯の代わりに食べられたサツマイモを長期間保存する保存装置を開発しました。

政太郎の特許取得数は60件にもおよびます。政太郎の業績は高く評価され、魚津市の名誉市民第1号になりました。



魚津市の名誉市民となった政太郎



サツマイモ保存装置の温度調節部分（魚津歴史民俗博物館蔵）



当時世界一といわれた上野・地下鉄ストアの大時計

夢や志をかなえたポイント

- ・貧しくても希望をもって生きる
- ・だれもやっていないことに挑戦する
- ・困っている人を助けることを考える

1890 (明治23)	0歳
下新川郡下野方村に生まれる	
1915 (大正4)	25歳
早稲田大学理工科を卒業	
1922 (大正11)	32歳
助教となり欧米へ留学	
1926 (大正15)	36歳
早稲田大学の教授になる	
1930 (昭和5)	40歳
早稲田式テレビジョンの開発に成功	
1931 (昭和6)	41歳
東京・上野に世界最大級の時計を設置	
1949 (昭和24)	59歳
サツマイモの保存装置を開発	
1964 (昭和39)	74歳
勲四等旭日小綬章を受章	
1970 (昭和45)	80歳
魚津市の名誉市民に選ばれる	
1983 (昭和58)	93歳
亡くなる	

コラム 育てられた魚津を忘れない

政太郎は業績が評価されてからも生まれ故郷の魚津を愛してやまない人でした。こんな詩を残しています。「う（産）んでくれたるわたしの魚津／おん（恩）は絶対わすれない／づうま（老人）になった今日までも」。この詩は顕彰碑にも書かれています。



政太郎と家族

*周波数【しゅうはすう】電波、音波などで電気振動の周期的変化が1秒間に繰り返される回数のことです。単位はHz（ヘルツ）です。

幻の焼き物を作りたい 石黒 宗磨

中国の古い陶磁器を研究

木の葉天目茶碗を再現

人間国宝の陶芸家



1893 (明治26) 年4月14日—1968 (昭和43) 年6月3日

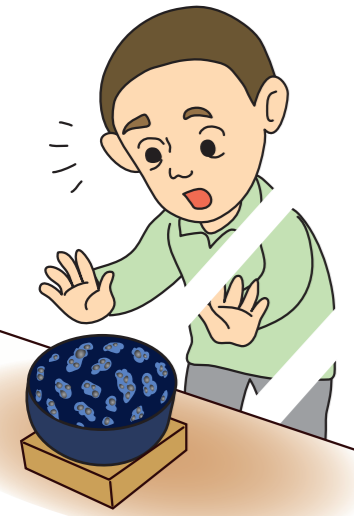
子どものときから手先が器用

射水郡作道村 (現射水市) の医師の長男に生まれました。子どものころから身体が大きく力持ちでした。手先が器用で粘土細工や絵を描くことも好きでした。県立富

山中学校 (現県立富山高校) で、生徒がストライキを起こす事件があり、宗磨はストライキをやめさせようとした先生を殴り、中退させられています。



少年時代の宗磨



自分の手で「曜変天目茶碗」を作りたい

宗磨は東京の中学校へ移り、慶応義塾へ進みましたが中退してしまいました。東京の会社に勤めた後、20歳になって軍隊に入り、朝鮮で軍隊生活を経験しました。そのころ、朝鮮の古い陶磁器 (粘土に石英などの粉末を混ぜて練り固め、焼いたもの) を見て、陶磁器を作る技術に興味をもちました。

1916 (大正5) 年、宗磨は故郷へ帰り、父が趣味で作った楽焼

(低い温度の火で焼く陶器) の窯でロクロの練習をしたり、作品を焼いたりするようになりました。

東京の焼き物の展示会で「曜変天目茶碗*」を見た25歳の宗磨は、強い感動を受けました。天目茶碗は、茶碗の内側に光を当てると、七色の虹のような輝きを放ちます。宗磨は「こんな素晴らしい陶芸品を自分の手で作ってみたい」と陶芸の道を志す決心をしたのです。

宋の陶磁器を研究

宗磨が京都の蛇ヶ谷という所へ移り住んだとき、家の近くに有名な京焼の陶工、真清水蔵六と弟子の小山富士夫が住んでいました。小山は後に世界的な陶磁器研究家になった人です。宗磨と小山は中国の陶磁器の中でも特に宋の時代の焼き物の魅力を語り合い、ともに研究を深めました。

京都の蛇ヶ谷から八瀬へ移ってから、宗磨は「木の葉天目茶碗」

の制作にとりかかりました。窯で焼くときに木の葉を置いて葉っぱの模様を浮かび上がらせたもので、中国の宋の時代に盛んに作られました。今ではその製法を知る人がいません。宗磨は「人にできることが自分にできないはずがない」と食事や寝るのも忘れて制作に励みました。



制作中の宗磨

* 曜変天目茶碗【ようへんてんもくちやわん】南宋時代に中国福建省建陽市にあった窯で作られたとされ、天目茶碗のうちの最上級とされます。日本にだけ数点が残り、国宝や重要文化財に指定されています。

パリの展覧会で世界的評価

何度も失敗してあきらめかけていたとき、たき火の中に置いたムクの葉が灰になっても形が崩れないことにヒントを見つけました。天目茶碗に使ううぐすり (釉薬) を素焼きの茶碗にかけ、土と灰で作ったうぐすりでもまぶしたムクの葉を置いて焼いてみました。すると、葉の形がきれいに残ったのです。

宗磨の「木の葉天目茶碗」は陶芸界に衝撃を与えました。それ以来、宗磨はさまざまな技法を編み出し、独特の感じをかもし出す作品を次々と発表していきました。

1950 (昭和25) 年、パリで開かれた現代日本陶芸展で「失透釉鉄流文壺」「白地チョーク描ばら文鉢」などが高く評価され、宗磨の名は世界に知られるようになりました。

1955 (昭和30) 年、宗磨は「人間国宝」に認定されました。

宗磨は生涯に一度も決まった師

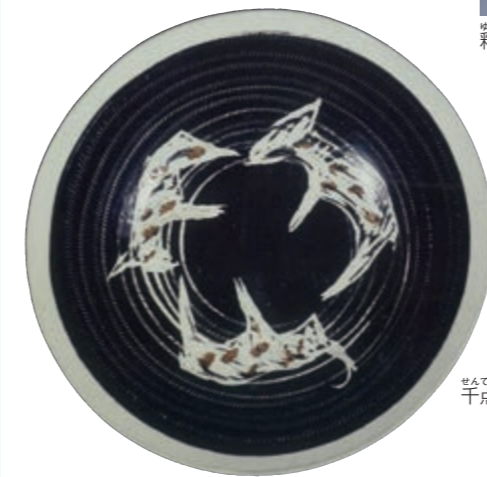
匠をもたず、自分で勉強して失敗と成功を繰り返しながら独自の芸術の世界をつくり上げたのです。



木の葉天目茶碗 (射水市新湊博物館蔵)



釉彩干柿文壺 (射水市新湊博物館蔵)



千点獣文鉢 (射水市新湊博物館蔵)

夢や志をかなえたポイント

- 古いものにあるよさを見つける
- あきらめずに挑戦し続ける
- 新しいやり方を考える

豆知識 宗磨は石黒信由 (→ 20 ページ) の子孫です。新湊市 (現射水市) の名誉市民第1号に選ばれました。

- 1893 (明治26) 0歳
射水郡作道村に生まれる
- 1911 (明治44) 18歳
県立富山中学校を退学し慶応義塾普通部に転学
- 1913 (大正2) 20歳
陸軍に入隊
- 1916 (大正5) 23歳
故郷へ帰り楽焼の窯で作品を作り始める
- 1918 (大正7) 25歳
東京で焼き物の展示会を見て陶芸家を志す
- 1937 (昭和12) 44歳
パリ万国博覧会に出品して銀賞を受賞
- 1943 (昭和18) 50歳
「木の葉天目茶碗」を完成させる
- 1950 (昭和25) 57歳
パリの現代日本陶芸展に出品
- 1955 (昭和30) 62歳
重要無形文化財保持者 (人間国宝) に選ばれる
- 1956 (昭和31) 63歳
新湊市の名誉市民に選ばれる
- 1968 (昭和43) 75歳
京都の自宅で亡くなる

コラム 漆芸の可能性を広げた山崎覚太郎

山崎覚太郎は上新川郡岩瀬町 (現富山市) に生まれ、県立工芸学校 (現県立高岡工芸高校)、東京美術学校 (現東京芸術大学) をいざりもトップの成績で卒業しました。

時絵が主流だった日本の漆芸界の中で、鮮やかな色の漆を使って絵画のような表現方法を確認し、芸術としての漆芸の可能性を広げました。芸術院会員や文化功労者に選ばれています。



山崎覚太郎作「残映」 (高岡市美術館蔵)

新技術で農業をよくしたい 伊東 森作

黒部西瓜の新品種を開発

「流水客土」で農地を改善

中国にケヤキとスギを植林



1897 (明治30) 年—1997 (平成9) 年2月21日

扇状地の農家の苦勞を知って

森作が生まれた下新川郡大布施村(現黒部市)は、黒部川の上流から流れてきた砂などが積み重なってできた扇状地*にあります。昔から米作りは行われてきました

が、水田は水はけが良すぎて、米作りに適した土地ではありませんでした。このため農家ではスイカなどの作物の栽培が盛んに行われていました。



森作が生まれた家

売れる黒部西瓜を開発したい



森作が描いたスイカの絵。カラー写真のない時代は、このような手描きの絵で記録していました。

下新川郡立農学校(現県立桜井高校)を卒業した森作は、大布施村の「農会」という農業の改良発達を図る団体の技術者になりました。森作は農家の収入を増やすために、新しい品種のスイカをつくり、黒部の名産として売り出したいと考えました。

まずアメリカの「フロリダフェボックツ」という品種を育てましたが、楕円形で見た目が悪かった

ので、丸い形にするために奈良の大和西瓜と掛け合わせてみました。多くの欠点が残ったので、甘露(スイカの一種)を掛け合わせ、「新黒部西瓜1号」と名づけて発表しました。このスイカは大阪の品評会で一等賞を取りました。とはいえ、栽培が難しく、とれる量も少ないという欠点が残っていました。このため、農家への普及が難しかったのです。

カラスが教えた努力の成果

森作はいろいろな品種を掛け合わせたり、条件の悪い畑で栽培してみたりして努力を重ねました。こうした苦勞がたたってか病気になるてしまい、入院することになりました。

品種改良をあきらめようと畑を見回していると、カラスに食べられて大きな穴が空いたスイカが目に入りました。このスイカは立派な形をしています。おいしいから

カラスがたくさん食べたのです。今までの努力がむだでないと考えた森作は、病気が治って退院した後、品種改良にいっそう励みました。

そして1938(昭和13)年、病気に強い品種の開発に成功し、「新黒部西瓜7号」と名づけました。このスイカは飛ぶように売れました。森作が品種改良に取り組んでから16年後のことでした。



スイカに接木をする森作

*扇状地【せんじょうち】山地から低地へ流れ出た河川の流がゆるやかになる場所に、石や土砂などが扇形に積もってできる地形のことです。

流水客土で米の増収を図る

スイカの栽培には成功しましたが、扇状地の水田は水はけが良すぎるとい問題が解決していません。そこで、森作は水田の水もちを良くするための研究を進めました。

砂地の水田には赤土を混ぜると水もちが良くなるのが分かっています。森作は大布施近くの宮野山の赤土を混ぜることにしました。

ホースで水を当てて赤土を水に溶かした泥水をつくり、農業用水へと流して水田まで運ぶ「流水客土」という方法を考えつきました。

新しい方法に不安を覚え、反対する人もたくさんいました。お金がかかる仕事なので、県や政治家にも相談しましたが、理解してくれる人がなかなか増えません。そこで、森作は県議会議員になり、議員として周辺の市町村長らを説得して回りました。

その結果、黒部川沿いの幅広い農業関係者が集まって、「流水客土」を進める団体がつくられました。1951(昭和26)年から工事

がスタートしました。工事後、赤土を混ぜ込んだ水田では、以前よりも15~30%も多く米がとれるようになったのです。



流水客土採掘現場(黒部市教育委員会提供)



泥水を流す木樋(黒部市教育委員会提供)



流水客土は「黒部川沿岸冷水温障害改良事業」として行われました。水もちが良くなることで、水田の水温が安定し、米の収穫量が上がりました。(黒部市教育委員会提供)

夢や志をかなえたポイント

- 何度失敗してもあきらめない
- 目標実現のために一生懸命に勉強する
- 常に新しい方法に挑戦する

豆知識 大正時代には、現在の入善町でもスイカの栽培が盛んになりました。入善のスイカは「入善ジャンボ西瓜」として、今も全国に出荷されています。

1897 (明治30)	0歳
下新川郡大布施村に生まれる	
1912 (明治45)	15歳
下新川郡立農学校を卒業	
1917 (大正6)	20歳
大布施村農会技師となる	
1931 (昭和6)	34歳
「新黒部西瓜1号」の開発に成功	
1938 (昭和13)	41歳
「新黒部西瓜7号」の開発に成功	
1947 (昭和22)	50歳
富山県議会議員になる	
1952 (昭和27)	55歳
黒部川冷水地帯土地改良総代になる	
1954 (昭和29)	57歳
黒部市農業委員会会長になる	
1967 (昭和42)	70歳
土地改良などの功勞で褒章を受章	
1997 (平成9)	99歳
亡くなる	

コラム 中国の山林にケヤキ、スギを植林する

森作は1979(昭和54)年、「日中友好の旅」で中国へ行った息子の哲男から、中国の樹林が荒れていたことを聞きました。

森作は「戦争が中国に大きな被害を与えたのだから、せめて植林によっておわびしたい」と考え、中国の農業技術者と交流を進めていた県立技術短期大学(現県立大学)の定立原真教授にお願いし、湖南省の山林にケヤキ5000本、スギ1000本の苗を植えてもらいました。



森作がケヤキなどを植えた20年後、遺族と定立原教授(中央)が中国を訪れました。

食糧危機を解決したい 稲塚 権次郎

「小麦農林10号」の生みの親 コシヒカリの基となる米を開発 「緑の革命」の功労者

1897(明治30)年2月24日—1988(昭和63)年12月7日



ダーウィンの『進化論』を学ぶ

東砺波郡能美村(現南砺市)で農家の長男に生まれました。幼いころから勉強が好きで、学校ではずっと成績が一番でした。県立福野農学校(現県立南砺福

野高校)へ進み、担任の先生からダーウィンの『進化論』を勧められ、遺伝や品種改良について興味をもちました。

権次郎の生まれた家



たくさんとれる作物品種を開発したい

権次郎は農学校を卒業して小学校の代用教員をしながら、進学を目指して勉強しました。東京帝国大学農科大学農学実科(現東京大学)に合格した権次郎は当時の新しい学問であったメンデルの法則*や育種学を勉強して知識を高めました。権次郎は身に付けた新しい知識や技能を生かせる農商務省農事試験場に就職しました。この年1918(大正7)年、富山県で米騒動

が起こり、政府は米の生産を増やすのに懸命でした。農事試験場の課題は、冷害や病害虫に耐え、収量の多い作物品種を早く作り上げることでした。

また、富山県では内務省の役人から射水郡長になった南原繁(香川県出身)が、下条川・新堀川改修工事計画を県知事に訴え、湿地だった射水平野を乾田化する基礎づくりを行っています。



東京帝国大学農科大学



学生時代の権次郎

東北の冷害から農民を救う

権次郎は秋田県にある農事試験場陸羽支場に転勤しました。ここでは以前から進められていた稲の品種改良を担当し、いろいろな品種の中から冷害に強いものを見つけられました。その品種は、「陸羽132号」と名づけられました。「陸羽132号」が見つけたことで、たびたび起こった大凶作から抜け出すことができ、この発見は地元の人たちを喜ばせまし

た。岩手県に住んでいた宮沢賢治も詩の中でほめたたたえただけでした。

農事試験場陸羽支場での権次郎の仕事は新潟県農事試験場の研究員に引き継がれ、後に「水稲農林1号」が完成しました。やがてこの品種から「コシヒカリ」や「ササニシキ」などの品種が生まれていきました。



熱心に研究する権次郎

*メンデルの法則【めんでるのほうそく】 オーストリアの植物学者メンデルはエンドウ豆などを研究中、掛け合わせ方によって遺伝にきまりがあることを発見しました。彼の死後、複数の学者らによってこの法則が証明されました。

ノーベル賞を生んだ奇跡の小麦

権次郎はその後、岩手県農事試験場に転勤し、ここでは小麦の品種改良を進めました。1929(昭和4)年に「小麦農林1号」を開発してからも、アメリカ産や日本産の品種を掛け合わせてできた種を使って栽培を繰り返し、「小麦農林10号」を開発しました。穂が大きく背が低いこの品種は、倒れにくく、たくさん収穫できる特長があり、岩手、山形県の奨励品種に選ばれました。権次郎は1938(昭和13)年までに「小麦農林10号」をはじめとして8種類の新品種を作りました。

麦がとれる奇跡のような品種を開発したのです。これにより、世界的な食糧不足を解決する道が開かれました。このことは、「緑の革命」と呼ばれています。博士はその功績で1970(昭和45)年、ノーベル平和賞に輝いています。



小麦の生育を見守る権次郎

「小麦農林10号」の種はその後、メキシコで小麦の研究をしていたアメリカのボーローグ博士の手に渡りました。博士は「小麦農林10号」とメキシコの小麦とを掛け合わせ、それまでの2倍、3倍の小



小麦農林10号(富山県立南砺福野高校蔵)



岩手県立農事試験場全景

夢や志をかなえたポイント

- 学校で習うことに興味をもつ
- 学んだことを社会のために生かす
- 自分の仕事に全力を尽くす

豆知識 南原繁は射水郡立農業公民学校(現県立小杉高校)創設を立案するなど富山県の農業の発展に貢献し、後に東京大学総長を務めました。

1897(明治30)	0歳
東砺波郡能美村に生まれる	
1911(明治44)	14歳
県立福野農学校に入学	
1915(大正4)	18歳
東京帝国大学農科大学農学実科に入学	
1918(大正7)	21歳
農商務省に入省	
1935(昭和10)	38歳
「小麦農林10号」を開発	
1938(昭和13)	41歳
中国の華北産業科学研究所に勤める	
1948(昭和23)	51歳
金沢農地事務局に勤める	
1951(昭和26)	54歳
農業技術功労賞を受賞	
1971(昭和46)	74歳
勲三等瑞宝章を受章	
1980(昭和55)	83歳
農林水産大臣表彰を受賞	
1982(昭和57)	85歳
城端町の名誉町民に選ばれる	
1988(昭和63)	91歳
亡くなる	

コラム ノーベル賞受賞者が権次郎の生家で講演

ボーローグ博士は1981(昭和56)年10月、金沢市で開かれた日本育種学会で権次郎と感激の初対面を果たしました。さらに権次郎が亡くなった2年後、城端の権次郎の生家を訪れ、南砺農業会館で「小麦農林10号と緑の革命」と題し、講演して権次郎の仕事の偉大さをたたえました。



権次郎(左)とボーローグ博士との初対面

他人の利益をまず図ろう 吉田 忠雄

YKKの創業者

魚津商工会議所の初代会頭

経営哲学は「善の巡環」



1908 (明治41) 年9月19日—1993 (平成5) 年7月3日

好奇心の旺盛な男の子

忠雄は下新川郡魚津町（現魚津市）の貧しい家に、3人兄弟の末っ子として生まれました。いつも野山を駆け巡って遊んでいましたが、小学校の成績は優秀でした。

分からないことは大人にじっくり尋ね、分かるまで引かない子どもでした。物事の奥深くまで知らないで済まない性格を母親は「ゴボウの根っこ」に例えました。

下中島尋常小学校を卒業したころの忠雄



東京で大きな商売がしたい

家が貧しかったので進学をあきらめ、小学校を卒業した後、兄が経営するゴム靴店を手伝いながら、東京の有名な学校の授業内容を取った本を手に入れて勉強しました。「東京で大きな商売をしたい」と考えていたので20歳のとき、貯めたお金で東京へ行き、入善町出身の人が経営する中国陶器の輸入販売店で修業することにしました。

やがて日本と中国の戦争が始まったので、中国との貿易はできなくなり、この店は商売をファスナーの販売に切り替えました。忠雄はファスナーについて一生懸命勉強しました。ところが不景気のためこの店が倒産してしまったのです。忠雄は店の主人に勧められ、ひとり立ちしてファスナー工場を経営することにしました。

空襲で工場が焼け、魚津で再出発

1934 (昭和9) 年、忠雄はサンエス商会という会社をつくり、別の会社で作られたファスナーの販売を始めました。従業員は社長の忠雄を含めて3人です。当時のファスナーは品質が悪く、半分以上が不良品でした。忠雄は自分たちでファスナーを作ろうと1938 (昭和13) 年、東京の江戸川区に工場を建て、社名は「吉田工業」と改めました。2人の兄にも魚津から来てもらい、兄

弟で力を合わせて働きました。忠雄の会社のファスナーは国内だけでなく、外国にもたくさん売られました。太平洋戦争の影響で金属部分の銅が使用禁止になったときは、忠雄の提案でアルミ合金を使うことにして乗り切りました。しかし、工場は1945 (昭和20) 年の東京大空襲で焼け落ちてしまいました。忠雄は一からやり直すことにし、魚津に戻り工場を再建しました。



創業当時のサンエス商会



世界企業に成長し、平和に貢献

戦争が終わり、世の中が平和になると国内のファスナーの売れ行きは増えていきました。その勢いでアメリカへ輸出しようと考えましたが、日本で最も優れている吉田工業の製品でさえ、アメリカのものに比べると品質が劣り、値段も高いことに気づきました。当時のファスナーは、アメリカでは立派な機械で作られていましたが、日本では手作業で作られるのが当たり前だったのです。

そこで忠雄は、他社が手を出せなかった高価なアメリカ製のファスナー自動製造機を買入れ、日本のファスナーの関係者を驚かせました。また、1955 (昭和30) 年には黒部市にも工場を建てました。この工場はファスナーの製品だけでなく、その工場ですべて自分の会社で作るという、日本で最も新しい工場にしました。

日本のファスナーのほとんどがこの工場で作られるようになり、また、「YKK」の名前で世界中の多くの人に使われるようになりました。

海外にも次々と工場を建て、現在では世界の71の国と地域でファスナーやアルミ建材（サッシ）などの製造・販売を行っています。海外に工場を造るときは、自分たちだけがもうけるのではなく、現地の人々と利益を分け合うようにしているのです。日本が世界の国と仲良くしていくことに役立っています。



ファスナーの歯を自動的に植え付けられる高速自動植付機 (チェーンマシン)



工場で作業着姿の忠雄



完成当時の黒部工場

夢や志をかなえたポイント

- ・分からないことは、分かるまで尋ねる
- ・自立し、自分の力で道を切り拓く
- ・目先の利益だけを求めない

- 1908 (明治41) 0歳
下新川郡魚津町に生まれる
- 1934 (昭和9) 26歳
サンエス商会を創業
- 1951 (昭和26) 43歳
最新鋭のファスナー生産工場を完成させる
- 1955 (昭和30) 47歳
黒部工場稼働
- 1959 (昭和34) 51歳
大河内記念賞を受賞
- 1960 (昭和35) 52歳
紫綬褒章を受賞
- 1967 (昭和42) 59歳
吉田育英会を創設
- 1971 (昭和46) 63歳
オランダ・スネーク市名誉市民に選ばれる
- 1978 (昭和53) 70歳
勲二等瑞宝章を受賞
- 1981 (昭和56) 73歳
「財界」経営者賞、第3回毎日経済人賞を受賞
- 1993 (平成5) 84歳
亡くなる

独自の経営哲学「善の巡環」

吉田忠雄が考えだし、経営に生かした言葉です。自分の目先だけの利益を求めるのではなく、関係する周りの人にも利益があるようにすれば、やがてそれが自分にも返ってくるという考え方で、アメリカの鉄鋼主といわれたカーネギーの言葉から学んだものです。この考えがあったからこそ、事業が世界の人々に受け入れられたといえます。



書「善の巡環」

豆知識 忠雄は魚津町議会議員や魚津商工会議所初代会頭なども務め、黒部市と魚津市の名誉市民に選ばれています。